晴れのち曇り

「日曜寸言」０４０５２３

「既存の国立大学に法人格を付与するというに過ぎないのだから、新しく検討するなどというのでしょう」などと、多くの人から言われた。新しく一つ大学を作るようなことは無いのだ、そうではない。新しい酒を詰めるのでは酒袋に新しい酒。しかも、古い酒袋も痛むので、皮袋も新調しないと面白くない。そんなこんなで、多忙な日々を過ごしてようやく例年より少し早く来た春に作業は国立大学法人への移行作業を終えた。

出力１００ワット程度のポンコツ心臓を酷使して、連日法人化準備に精を出し、いざそれが無事出発できたといいうざ湯上りに軽いめまいを感じた。念のため大学の附属病院にMRIで診察してもらうと、燃料パイプに軽いて目詰まりがあるという。上司の厳命もあって、すぐに入院。幸い、早期発見と適切な治療のおかげで、一週間で無罪放免となるにはなった。

入院などという事態はそれこそ少年時代の虫垂炎の手術以来であり、ポンコツエンジンのオーバーホールには千載一遇のチャンスだ。積んでおいて読まない本、買ったきり聴かない曲のCDを、場所柄どの少ないバルトーク難しい家人の非難をよそに、大量に持ち込んできまえないという

命の洗濯に励んだのである。

病室の窓には左に富士山、右には蛭ケ岳から、富士川の谷をまたいで赤石山脈に続く連山が観光パンフレットのように展望される。右左口峠に向かう山道の桜が日一日上へと昇っていく。富士山上空にぽっかり浮かんだ白い雲を、それが窓枠から消えるまで眺め続けるこの世の中に残った贅沢な時間がまだまだたっぷりとあるのだと、改めて少年のような感動しながらの一週間だった。

理屈では分かっていたのだが、実際にベッドに身をおいてみて実感したことがあるのだ。それは、前記の感動とは裏腹にえらい事態になったなあ、とはいうまでもない。不安だ。今更言うまでもなく、大学病院は、地域の第三次医療機関として先進医療の医師養成機関としても、重要な役割が求められている。しかも、実施機関としても、医療政策の中での経営的自立なのである。

トは、この度の法人化コンセプトは、要するに競争的環境の中での経営的自立なのである。だが、そんな事で大学病院が担ってきた機能や役割を継続することができるのだろうか。

必ずしも利用効率の高くない先端医療機器も、地域基幹病院としては装備して地域に供する責務がある。利益だけ考えるなら、やり方は別だ。それでは地域住民の役には立たない。

ゆったりとした時の流れの充実感を味わいながらも、迫り来る不安に呻吟した一週間でもあった。